

長与町図書館友の会「自然観察会」

ニュースレター

NO. 6

平成26年 第6回植物観察会報告

>>>>>山川 続

(長与町図書館友の会「自然観察会」代表)

1. 開催日時：平成26年7月12日(土) 9時30分～13時30分

天候：曇り時々雨

2. 集合場所：長与駅前ロータリー

3. 観察場所：長与町総合公園運動広場～斉藤郷白津

4. 観察テーマ：長与町内のハマボウを観察しよう。

5. おもな観察内容

(1) はじめに

昨年の7月21日、第6回観察会を諫早市立大草小学校前(諫早市多良見町野副)の入り江沿いで行い、ハマボウの大群落を観察した。そこで、今年もと思ったが、広報ながよ(平成25年(2013年)8月号)の地元再発見の欄に、「岡郷の総合公園裏手の川端に“ハマボウ”が満開の花を咲かせました。」の記事があるのを知り、できれば、今年は町内のハマボウを観察しようと計画した。

そこで、今春、運動公園周辺のどこにハマボウが生えているのかを調査したが、見つからなかった。この時期、まだ葉が生えていないから気づかなかったのだろう。再度、観察会の下見を兼ねて、7月に入り、運動公園周辺を調査したところ、図1の③の川縁(写真1の左下)に生えているのを確認した。黄色い花が3輪ほど咲いていた。満潮時、海水が入ってくる砂地で、ハマボウの生育環境に適した場所である。

枝が横に広がっているが、高さが1mにも達していなかったのも、不思議に思った。偶然通りかかったご婦人から話を聞き、毎年地元の方が剪定されているということであった。御婦人にハマボウの説明をすると、貴重種であることをご存じなかった。昨年の諫早市多良見町野副にあるハマボウ大群落でも同じだったが、黄色い花が長期間咲いてきれいだということは知っているが、貴重種であることは、意外と地元の方は知らないようである。図1の③の川縁には一株しか生えていないが、今後、川縁沿いに群落を形成させると、一つの名所になるのではと思った。また、この一株は植えられたものでなく、自然に生えている可能性が高いと思うので、大事に保存して欲しい。



(図1) ハマボウの観察場所



(写真1) 総合公園裏手の川端のハマボウ

(2) 観察した主な植物

①ハマボウ (アオイ科フヨウ属)

図1の③のハマボウまで、総合公園内の植物を歩きながら観察するために、町民体育館横に駐車した。ここに止めたのが幸いした。

車から降りて、体育館の方へ歩いていくと、駐車場横の植え込み(図1の①)の中に今日の目当てのハマボウが植えてあるのを発見した。苦労して川縁に生えているハマボウを見つけたのに、こんなところで見つかり、ちょっとがっかり、かなりびっくりだった。5株ほど植樹してある。もし、プール横に駐車したら、発見できなかったかもしれない。

図1の③のハマボウを観察した後、戻っていると、図1の②にも2株植樹してあった。塩生植物であるが、海水が届かない公園などでも育つようだ。

また、長与町民文化ホール駐車場横の花壇にも一株植えてある。公園や花壇ではなく、本来の生息地である図1の③あたりに植えたら、大群落を形成して、美しい景観になるのではないかと思った。



(写真2) 町民体育館横のハマボウ

- ・内湾や河口の塩性湿地に生育する。
- ・7月から8月にかけて、オクラやケナフに似た黄色の美しい花を咲かせる。
- ・大村湾は約7000年前に海水が流入してできたもので、海水が外海から流入した時に、湾外のハマボウが侵入し、大村湾側に広がっていったと考えられている。

②オオケタデ (タデ科イヌタデ属)

長与町特産品直売所「まんてん」横の歩道沿いにある花壇に植えてあった。

原産地は中国、インド、マレーシアなどで、日本へは江戸時代に観賞用として渡来した。今では野生化して北海道から沖縄にかけて分布している。

茎に毛が多いのが特徴で、名の由来にもなっている。

葉は卵形で先が尖り、互い違いに生える。イヌタデを大きくしたような花である。

先の丸い花びらに似たのが5枚あるが、これは花弁ではなく萼片である。

葉汁に毒消しの薬効がある植物として知られている。



(写真3) オオケタデ

- ・化膿性の腫れ物→乾燥した種子を粉末にして、1日6グラムを2~3回に分けて水で服用する。乾燥した葉は、葉1枚、水0.4リットルで煎じて、煎液で患部を洗う。
- ・毒虫に刺されたとき→生の葉を洗い、もみ潰した青汁を患部にすり込む。

③ビヨウヤナギ（オトギリソウ科オトギリソウ属）

前回（5月31日）の観察会で、中尾城公園に植えてある同じ仲間のキンシバイ、タイリンキンシバイ、セイヨウキンシバイの3種類を観察したが、残念ながら、植栽されていないビヨウヤナギは、観察できなかった。

斉藤郷白津地区の民家の間を、時津町へ向かっていると、庭先にビヨウヤナギが植えてあった。セイヨウキンシバイと違って、おしべがカーブしているのが特徴である。

古くから観賞用に栽培されたいが、現在ではビヨウヤナギを見かけることは案外少ないようだ。新興住宅地などではビヨウヤナギに似たセイヨウキンシバイ（ヒペリクム・カリキヌム）であることが多い。



（写真4）ビヨウヤナギ

④アケビガキ（バンレイシ科ボポー（アシミナ）属）

斉藤郷白津地区の民家に植えてあるカリンの実が大きくなっているのを観察した。もっと早い時期だったら、とても美しいピンク色の花を見られたと思う。

集落を過ぎ、時津町へ向かう道路を上っていくと、道路下におもしろい形をした、今まで見たことのない果実をみつけた。エンゲイナビ園芸Q&A画像掲示板に投稿して、名前を教えてください。

北米東部原産で明治時代に日本に持ち込まれたようだ。バンレイシ科の果樹のうちで、唯一、温帯原産であるが、寒さには非常に強いようだ。そのため、この場所でも生育できるのだろう。果実の中には、ビワのような大きなタネがあり、香りが強くクリーミーな部分を食べる。致命的な病害虫もなく、無農薬で栽培できる。一つの花の中で、雌しべが先に熟し、雌しべの受精能力がなくなるころに雄しべが熟して花粉が出てくるので、受精しにくく、結実しにくいといわれる。また、同一品種の花粉では受精しにくい、すなわち自家不和合性の強い品種が多いそうだ。したがって、栽培にあたっては、異品種を混植するか、同一樹に異品種をつぎ木する必要があるそうだ。



（写真5）アケビガキ（ボポー）

⑤モモイロヒルザキツキシソウ（アカバナ科マツヨイグサ属）

マツヨイグサの仲間にはめずらしく昼間に開花するのでこの名がついた。北アメリカ原産の帰化植物で、淡桃色～白色の4弁花を茎の上部につける。この中で、桃色の花をモモイロヒルザキツキシソウとして分ける場合もある。花びらの数は4枚で、つけ根のところは筒状になる。雄しべは8本ある。雌しべの柱頭は十字状に裂ける。ツキシソウの花は夕方咲き始めは白色であるが、翌朝のしぼむ頃には薄いピンク色となる。



（写真6）モモイロヒルザキツキシソウ

⑥ソテツ雄花（ソテツ科ソテツ属）

ソテツ類の中で日本に自生がある唯一の種である。根に根粒があり、藍藻類を共生させていて、それらが空中窒素から窒素化合物を作るため、やせた土地でも生育できる。

鉄を受けると元気になる（蘇鉄）という伝承があり、茎にクギを打ち込まれていることがよくある。ソテツの幹の内部や種子には大量のデンプンが貯蔵されている。飢饉時などにはこれを取りだして食べたという。しかし、サイカシンという毒が含まれており、十分に水にさらして除去する必要がある。



（写真7）ソテツの雄花

⑦ホソバツルノゲイトウ

（ヒユ科ツルノゲイトウ属）

田の畔や河川の水際といった湿った環境を好んで生育する熱帯アメリカ原産の一年草であるが、岡郷金比羅橋付近の空き地に生えていた。無柄に近い葉を対生につける。葉が細長く、直径 3mm 程度の球状の花序を葉の付け根につけるのが特徴である。



（写真8）ホソバツルノゲイトウ

⑧ツマグロヒョウモンの雌（タテハチョウ科）

長与駅前ロータリーに植えてあるランタナ（和名はシチヘンゲ（七変化））の蜜を吸っていた。雌の前翅先端部が黒色で、斜めの白帯を持つのが特徴である。全体に鮮やかで目立つ色合いだが、これは有毒の蝶であるカバマダラに擬態しているとされている。幼虫は各種スミレ類を食草とし、野生のスミレ類のみならず園芸種のパンジーやビオラなども食べる。



（写真9）ツマグロヒョウモンの雌

○主な参考・引用資料

- ・だんじりのまち大阪府岸和田市の樹木図鑑：ビョウヤナギ
- ・イー薬草・ドット・コム：オオケタデ
- ・エンゲイナビ園芸Q & A 画像掲示板
- ・みんなの花図鑑：オオケタデ（オオベニタデ）
- ・中西弘樹、中西こずえ、高木麻美：ハマボウの地域的変異と個体群多様性
- ・NHKみんなの趣味の園芸：ポポー

長与町図書館友の会「自然観察会」 ニュースレター NO. 6

発行日：2014年7月29日

編集：山川 続 メール：yamagawa1957@yahoo.co.jp

<http://www005.upp.so-net.ne.jp/yamagawa/syokubutsu-kansatsukai-annai.html>

発行者：長与町図書館友の会「自然観察会」
